# 第５回 全国大学体育連合
# 指導者養成研修会

全国大学体育連合は「第５回大学体育指導者養成研修会」を３月８日（土）～ 11日（火）に立教大学新座キャンパスにて開催し、講師・スタッフ・補助員を含め81名が参加しました。

プログラムは以下の通りです。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

| | 午前（９:00～12:00） | 午後（12:00～18:00） | 午前（19:00～20:30） |
|---|---|---|---|
| ３月９日（日） | 受付（10：00）／開会式／講習① | 昼食／講習②／ワークショップ | 夕食および情報交換 |
| ３月10日（月） | 講習③ | 昼食／講習④／講演 | 種目別ディスカッション |
| ３月11日（火） | 講師紹介／体験講習（講義・実技） | 昼食（11：30）／体験講習（講義・実技）／修了式 | |

＜講　習＞

**☆レクリエーショナル・ニュースポーツ**

講　　師：師岡文男（上智大学）

**☆ ラグビー**

講　　師：齊藤武利（白鳳大学）、竹村雅裕（筑波大学）、田中充洋（明治大学）、
早坂一成（名古屋学院大学）、廣瀬勝弘（鹿児島大学）、廣瀬恒平（国際武道大学）、
溝畑　潤（関西学院大学）、山本　巧（防衛大学校）、和田浩一（フェリス女学院大学）五十音順

**☆ バレーボール**

講　　師：松井泰二（早稲田大学）
田中博史（大東文化大学）

**☆ アダプテッド・スポーツ**

講　　師：内田匡輔（東海大学）

# 実技指導研修会 報告

## レクリエーショナル・ニュースポーツ

（講　　師）師岡文男（上智大学）（日本フライングディスク協会会長・日本レクリエーション協会理事）
（場　　所）立教大学新座キャンパス
（参加人数）16 名
（記 録 者）ライトナー・カトリン・友海子（立教大学）、今西　平（立教大学）

### ＜講師＞

師岡文男先生

### ＜研修スケジュール＞

●**ガイダンス**：本研修の概要と目的
●**研修１**：フライングディスク
●**研修２**：フロアボール，スポーツチャンバラ，シッティングバレーボール
●**研修３**：ゴールボール，ソフトペタンク，キンボール
●**研修４**：グループ別でのレクリエーショナル・ニュースポーツの創作と模擬授業

### ＜ 研修内容 ＞

**研修１日目　３月９日（日）**

●**ガイダンス**　11:00 ～ 11:30

実技に先立ち，演習教室にて本研修の概要と目的の説明が行われた. ニュースポーツとは何か. アダプテッド･スポーツとは何か．いわゆる「スポーツ」や「障害者スポーツ」と呼ばれているものと何が違うのか．その上で，大学の体育の授業で何を伝えるべきなのか，についての説明がなされた.

●**研修１**　11:30 ～ 13:00

**＜フライングディスク＞**

フライングディスクは現在，さまざまなルールのもと多様な種目が行われている．その中でも本研修では，ディスクゴルフとアルティメット，ドッヂビーを実践した．これに先立ち，フライングディスクの投げ方と，その指導方法について講師より解説がなされた.

フライングディスクの投げ方は，基本的な投げ方であるバックハンドスロー，利き手側の体側から放つサイドアームスロー，頭上から投じるアップサイドダウンスローを講習した．投じられたディスクにカーブをかけたり，床面でホッピングさせる「スキップ」という技術も詳細に解説があった.

●**研修２**　14:00 ～ 17:00

**＜フロアボール＞**

プラスチック製のスティックとボールを用いた，室内用のホッケー形式のゲームが実践された.

**＜スポーツチャンバラ＞**

専用の柔らかい剣を用いた，剣道・フェンシング形式の格闘技ゲーム．本講習では，公式ルールのままでは初心者が楽しむためには困難であることが解説され，その対処方法として，防具(面)に紙風船を取り付けて対峙し，相手の紙風船を剣で打突し，割ることによって得点が得られるようなルールにする方法が紹介され，それを実践した.

**＜シッティングバレーボール＞**

座った姿勢で行なうバレーボール．パラリンピックの競技としても採用されており，用具やルール，使用設備を工夫することで多様なパーソナリティを持つ対象者に採用できることが解説された.

**研修１日目　３月10日（月）**

**●研修３**　9:00 ～ 12:00

**＜ゴールボール＞**

アイマスクによって視界が遮断された状態にし，鈴が入ったボールを交互に転がしあって，守備陣営の間隙をつく（対して，阻止する）ゲーム．公式用具を用いなくとも，工夫次第で取り組むことができることが紹介された．

**＜ソフトペタンク＞**

ビュット（目標球）にブール（ボール）を投げ合って，相手チームよりブールをビュットに近づけたほうが勝ちとなるゲーム．

**＜キンボール＞**

直径122cm 重さ約１kg の大きなボールを用いた，４人１チームで行われるチーム対抗のゲーム．ボールを３人で支えて挙上し，１人が他チーム名をコールしながらボールを打ち上げる．コールされたチームは，ボールが床に落ちる前にキャッチしなければならない．

**●研修４**　13:00 ～ 17:00

**＜グループ別での模擬授業＞**

参加者は４グループに分かれ，レクリエーショナル・ニュースポーツを制限時間内で創作し，他グループを対象者とした模擬授業を行なった．

全てのグループの模擬授業が終わった後，それぞれのグループの取り組みやゲームの評価と感想の発表がなされた．

# ラグビー

（講　　師）後藤光将（明治大学）、齊藤武利（白鴎大学）、竹村雅裕（筑波大学）
田中充洋（明治大学）、早坂一成（名古屋学院大学）、廣瀬勝弘（鹿児島大学）
廣瀬恒平（国際武道大学）、溝畑　潤（関西学院大学）、山本　巧（防衛大学校）
（ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）嵯峨　寿（筑波大学）
（場　　所）立教大学新座キャンパス
（参加人数）７名
（記 録 者）鷲谷浩輔（千葉商科大学）

ラグビーの研修では、ラグビーに対して抱かれがちな「複雑さ」や「危険性」の懸念を払拭するべく、映像やジェスチャー用いながらルールをシンプルに紹介することと、実技の中でポイントを押さえながら安全性と楽しさを伝えることをテーマとして掲げられた。

## ＜講師＞

講師の先生方（上段左から）田中先生 , 嵯峨先生
（中段左から）溝畑先生 , 竹村先生 , 齊藤先生 , 廣瀬（恒）先生
（下段左から）廣瀬（勝）先生 , 山本先生 , 早坂先生

## ＜研修内容＞

**１日目**

**講習０．オリエンテーション（担当：嵯峨）**

コーディネーターである嵯峨先生から２日間の講習の流れの説明があり、続いて受講者の自己紹介を行った。

**講習１．キックオフ　さあ、ラグビーの授業を始めよう！（担当：後藤）**

ラグビーの授業を半期15回で行う際の、オリエンテーションの授業例の紹介を行った。授業の狙いが「プレー能力の向上」ではなく「競技観戦力、文化享受・創造力」にあることを確認した。また、2019年にラグビーＷ杯が日本で開催されるにあたり、「オリンピズム」と「ノーサイドの精神」から、当事者として参加する意義を学んだ。

**講習２．勇気あるランと仲間にパスを託すことでトライを奪おう（担当：田中、齊藤）**

場所を体育館に移し、まずはラグビーのグラウンド場に記されている様々なラインの種類と意味に付いて説明を受け、その後実技講習が行われた。まずは楕円球に慣れるため、以下の課題に取り組んだ。

・鬼ごっこ、手つなぎ鬼
・ゲームに結びつくランニングスキル（ストレート、ジグザグなど）
・ハンドリングスキル（１人、３人一組でグリッド、３人でトライを奪う）

**講習３．攻撃を食い止めよう！（担当：廣瀬（恒）、田中）**

ラグビー特有の防御の考えに触れるべく、以下の課題に取り組んだ。

・コーナーボール（ボールを介しての鬼ごっこ）
・手つなぎ鬼
・チームディフェンス（２対２、３対３）
・１対１のディフェンス

**講習４．タグラグビー（担当：廣瀬（勝）、溝畑）**

コンタクトプレーを排除したタグラグビーを通してボールを運び、陣地を奪い合うというラグビーのゲーム原理の理解を目指した指導例の説明を受けた。

・タグ取りゲーム（手つなぎ、小取り鬼、ジャンケン、ネコとネズミ）
・スペースを作るためのゲーム（トライアングル・ランニング、３対２）
・タグラグビーのゲーム

**講習５．キックを使ってみよう（担当：齊藤、竹村）**

ラグビーにおけるキックの種類や用途、得点方法等を知るために、以下の課題に取り組んだ。

・パントキック（ロングパント、ハイパント、ゴロパント、ショートパント）
・ドロップキック
・プレースキック
・プレースキック合戦

**講習６．ラグビーの全体像をつかもう！（担当：竹村）**

ラグビーの試合中に生じる様々な局面について、映像を用いた説明を受けた。
・ラン、パス、キック、トライ
・スクラム、ラインアウト、キックオフ
・モール、ラック
・タックル

**講習７．ラグビーに怪我はつきもの？**
**～タックル　ザ　インジャリー～（担当：竹村）**

ラグビーの怪我に関する事例報告や、怪我の予防対策等の説明を受けた。
・セーフティアシスタントの存在
・怪我が起こりやすいスクラムの組み方
・トレーニングとコンディショニング
・タックルにおける怪我

**講習８．ラインアウト　究極の空中戦から**
**おしくらまんじゅう？（担当：早坂、廣瀬（恒））**

空中でのボール争奪戦であるラインアウトと、そこから繰り広げられる激しい押し合い（モール）について、以下の課題に取り組んだ。
・スローイング
・ジャンプ、サポート、ムーブ
・ラインアウトマッチ（３～５人のボールの争奪）
・モール（規則の理解）
・ラインアウトモールマッチ（ボール獲得後の押し合い）

**講習９．スクラムを組もう！（担当：山本、早坂）**

ラグビーの中で最も複雑なプレーと言われるスクラムについて、以下の課題に取り組んだ。
・スクラムのメカニズムについて（役割、ボールの流れ）
・スクラムを意識した準備運動（ストレッチ、ドリブル）
・基本姿勢の習得（四つん這い、２人一組）
・スクラムにおけるボール操作（ボールキープ、フッキング）
・バインディング（３人、５人、８人）
・模擬スクラム（キープ、前進、障害物競争）
・対人スクラム（１対１、３対３）

**講習10．レフェリーにみるラグビー文化**
**（担当：溝畑、山本）**

ラグビーのもつ「キャプテンシー」や「ノーサイドの精神」について、レフェリーの視点から捉えた以下の説明を受けた。
・IRB が提供している DVD の紹介
・ルールブックの紹介
・試合前のブリーフィング（打ち合わせ）とコイントス
・試合中の選手とのコミュニケーション
・ノーサイド時の模様
・国際マッチ

**講習11．タックルのないラグビーをやってみよう**
**（担当：田中、齊藤）**

ラグビーはタックルを伴うことによって、野蛮で危険なイメージが持たれやすいが、タックルやいくつかのコンタクトプレーを除くと他のボールゲームと同様に楽しめることができる。以下の手順でその体験を行った。
・ハンドリング練習（３対２、３対３）
・ハンドリングゲーム（１回の攻撃のみでの AT,DF）

**講習12．タックルと、その後のボール争奪戦の醍醐味を知ろう！（担当：廣瀬（恒））**

ラグビーにおける醍醐味の一つとしてブレイクダウンでの攻防があげられる。その楽しさを知るために、以下の課題に取り組んだ。
・コンタクトバックへのタックル
・コンタクトバックへのオーバー
・タックル後を想定したブレイクダウンの攻防

**講習13．「クーベルタンとラグビー**
**――オリンピズムとノーサイド」（担当：和田）**

近代オリンピックの創始者クーベルタンはイギリス・ラグビー校のフットボールを見て、スポーツには教育的な力

があるとの確証をした。彼の見たフットボールがどんなものだったのかを知るべく、以下の説明を受けた。

・クーベルタンとラグビー（クーベルタンが見たフットボール、ラグビーへの評価）
・オリンピズムとノーサイド（オリンピズムの仕組み、ノーサイドの仕組み）

**講習14. クラブにおけるラグビーとクラブライフ**
**（担当：廣瀬（勝））**

コミュニティにおける市民のスポーツクラブのモデルはドイツに求めることができる。ドイツでのクラブライフについて報告を受けた。

・クラブハウスの設備と機能
・クラブハウスでの過ごし方
・多世代間交流の場としてのクラブハウス
・一貫指導体制

**講習15. アフターマッチファンクションを楽しもう！**

「ノーサイドの精神」の発露とも言える、アフターマッチファンクションを疑似体験した。

・アフターマッチファンクションにまつわる思い出
・アフターマッチファンクションの進行、式次第
・審判に対する感謝の言葉
・相手チームを讃える言葉
・試合後に交わされるエールの意味
・クラブハウスの設備と機能の説明

# バレーボール

（場　　所）立教大学新座キャンパス
（参加人数）17 名
（ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）村本和世（日本体育大学）
（講　　師）田中博史（大東文化大学）、松井泰二（早稲田大学）
（記 録 者）武田丈太郎（新潟医療福祉大学）

バレーボールの研修では、基本技術の習得方法のコツから、バレーボールが持つ楽しさ・爽快感などを十分に味わうことができるゲーム展開方法について紹介された。

## ＜講師＞

田中博史先生

松井泰二先生

## ＜研修内容＞

### １日目（担当：田中先生）

**講義（11:00 ～ 12:30）**

コーディネーターの村本先生から２日間の講習内容について説明があった後､研修が始まった｡松井先生からバレーボールの競技特性、ルールの解説及び授業で取り扱う際の留意点について講義があり、授業を展開していく中では苦手な学生に積極的に声を掛けたり、その学生と経験者の学生を上手く結びつけることで喜びを共有してもらえるように工夫しているという紹介があった。

**実技１（12:30 ～ 13:00）**

場所を体育館に移して実技研修が行われた。用具とその設置方法並びに安全管理について説明があった。具体的には、以下の３点であった。

・使用する用具の確認：支柱の穴、支柱の扱い方について
・ネットの設置：クランクの管理、ネットの貼り方、注意事項、支柱のカバーについて
・ボールの種類とその特徴について

**実技２（14:00 ～ 17:00）**

アイスブレーキングを兼ねたウォーミングアップの紹介があり、実際に行った。具体的には、２人で自己紹介をしながらパスを行ったり、５～６人程度のグループで円陣を組んで声を出しながらパスを行ったりするものであった。このような遊びの要素を取り入れながら楽しく行う方法のほかに、トレーニング要素を含んだウォーミングアップについても紹介があった。

次に、スパイク、レシーブ及びオーバーハンドパスの基本技術の習得について紹介があり、実際に行った。田中先生は以下のような注意事項を挙げていた。

・ボールを打つ：腕はバットではなくムチのように使う、手のひら全体を使う、打つ際に一歩前に踏み込む
・スパイクの練習：スタンディングで打つ、一歩助走をつけて打つ、オーバーパスを打つ
・レシーブ：ボールの軌道と腕の関係を考えながら打つ位置に気を付ける、体を前に運ぶイメージを持つ
・オーバーハンドパス：親指を地面と平行にして窓を造るイメージで手首を前に運ぶ、構えを早く作ってボールがくるまで待つ、打音を確認しながら回転が掛からないように気を付ける

最後に、基本技術の復習を兼ねて簡易ゲームを行い、１日目の研修は終了した。

オーバーハンドパスの練習

### ２日目（担当：松井先生）

**実技１（9:00 ～ 10:10）**

２日目の午前中は、「バレーボールのグループ戦術」をテーマに研修が行われた。松井先生から「ボールゲームの

目的は得点を取ること」という第１のキーワードが提示された。スパイクやブロックは得点を取るために行うプレーであり、実際のゲームにおいては全得点のうち約60％（＝15点）がスパイクでの得点であるという説明がされた。実際の授業においては、サーブで点数が入るのはバレーボールの醍醐味ではないため、前からサーブを打たせるなどしてスパイクで得点を取ることができるようなゲーム展開に留意しているということであった。

次に、ゲームライクドリルについて説明があった。ゲームライクドリルとは、「基本―システム―ゲーム」という一般的なピラミッド構造の考え方を逆さまにして、ゲームを底辺に捉えて実際の試合中のプレーを切り取った中でシステムや基本を習得しようというものである。このようなゲームライクドリルを導入することで、例えばボールがどこに飛んでくるのかという状況判断力等を習得することが可能であるということであった。特に、バレーボールでは「ボールコントロールが重要」ということを強調されており、第２のキーワードとして提示された。ボールコントロール、具体的には飛来方向・距離・高さを自在にコントロールできているか評価することが見えないテストとなり、授業内での学生の伸び率にも関わるという説明であった。実際の授業では、これらのことを意識しながら、安全・安心に心掛けて学生の良さを引き出すことをモットーとして取り組んでいるということであった。

さらに、チームの編成方法について説明があった。松井先生は以下の分類方法を用いながら、バランスよくチーム分けをしているということであった。

①今バレーをやっている人
②過去バレーをやっていた人
③今ボールゲームをやっている人
④過去ボールゲームをやっていた人
⑤今ボールゲーム以外をやっている人
⑥過去ボールゲーム以外をやっていた人
⑦スポーツ経験なし

休憩を挟んで、バレーボールにおけるゲームの２局面とそれらのフォーメーションについて紹介された。具体的には、自チームがサーブを打つ場面と相手がサーブを打つ場面に分けて、①ポジションの専門化（ポジションとその役割）、②ポジションの違いによる守備の約束ごと（守備範囲と優先順位）、③ポジションの違いによる攻撃の種類についてであった。特に、ポジションの専門化では、後ろの人が声を掛けることが重要であり、教員側にとっては動き方が見えて評価もできるという説明があった。

ホワイトボードを使ってのポジションの専門化の説明

**実技２（14:00 ～ 17:00）**

２日目の午後は、「習熟度の違いによるゲームとその考え方」をテーマに研修が行われた。実際にゲームを実施するうえで、ゲームの進度や技術の出来栄えによってルールを柔軟に変更することが重要であると説明された。具体的な変更例として以下のようなものを提示された。

・ボールの形状：レクリエーション用ボールを使用
・コートの広さ：前衛のみに制限する
・ネットの高さ：2m15 ～ 2m20に低くする
・チーム人数：７人等の人数を増やす
・得点方法：サーブ回数を無制限にする・サーブ位置を前からにする
・ゲームの開始方法：投げ入れるのを許す
・返球回数：４回でも可能にする
・点数：女子学生のスパイクは２点にする

松井先生は学生を態度・意欲・技能・かかわり合いの視点で評価しており、ゲームでの活躍だけではなく、片づけ等の取組みも評価対象にしているということであった。また、プレーにおける声は、①ボールを呼び込む、②意思表示、③判断、④励まし、⑤気迫に分類することができ、それらも評価対象となりえるということであった。最後に、教員にとって褒めるということは評価のポイントと捉えることができ、そのための仕掛け作りが重要となるというアドバイスがあった。

# 真の「Sports for Everyone」を目指して ～アダプテッド・スポーツの理論と実践～

（講　　師）内田匡輔（東海大学）
（場　　所）立教大学新座キャンパス
（参加人数）46 名
（記 録 者）竹下幸佑（筑波大学大学院）

アダプテッド・スポーツ（Adapted Sport、以下、AdS）の研修では、まず AdS の概念や理論、授業を展開していく上での注意点等についての講義がなされた。実技では、障害の種類や程度に適合（adapt）させた方法が紹介された。

## ＜講師＞

## ＜研修内容＞

### 講義

講義では、まず内田先生が AdS に関わることになった経緯が述べられた。内田先生は、元々、教科教育が御専門であるということで、教科教育に照らし合わせた上で AdS の講義がなされていた。AdS は、障害のある人のみならず、幼児から高齢者、体力の低い人であっても参加することができるスポーツであり、現代における子どもの体力低下など体育全体が直面する問題との絡みで説明がなされた。

### 実技

#### ①発達障害と AdS

発達障害の子どもに自身の身体感覚を認識してもらうために、新聞紙１枚を活用する形での様々な運動が教授された。

・新聞を用いた前屈、伸脚、アキレス等のストレッチ（２つ折り、４つ折り、８つ折り）
・お腹、背中、腕で新聞を落とさないようにランニング
・新聞の真ん中だけを十字に破り、端っこが破れないようにくぐり抜ける（自分の体の大きさを認識）
・新聞を丸めたボールを活用

２人組になって、簡単な渡し合い、キャッチボール、真上に投げてお互いの位置に移動しながらのキャッチング、シャドウドリブルをするパートナー追いかける運動等を行う。

写真２「新聞紙を活用した運動」

#### ②視覚障害と AdS

２人組でアイマスク（眼病予防のため、ティッシュは必須）を用いて、見えない状態での運動が教授された。

・背中合わせで口ジャンケン、ストレッチ
・ペットボトルの中身（ビー玉、おはじき等）を当てる
・１人はアイマスクをつけ、一人はガイド役で、体育館内をウォーキング、ランニング（ガイド役は常に声かけを怠らないこと）

#### ③聴覚障害と AdS

聴覚障害の子どもたちに授業を展開する上で、手話を用いることは必須である。しかし、手話ができない場合でも、口形を大きく、はっきりと動かすことでコミュニケーションをとることは可能である。注意点としては、「タマゴ」や「タバコ」など同じ口形で示される用語には、手で何らかのモーションを示す必要がある。

具体的な内容としては、手話で「数字」（１から31）、「月」、「日」を覚えて、誕生日の順に並んでいくゲームが行われた。勿論、ゲームが開始されると話すことはできず、上述の手

話のみでコミュニケーションが図られる。この方法は、大学での一般体育の授業においても、アイスブレーキングの一つとして十分活用することができる。さらに、学生が手話を覚えるきっかけにもなり得るものと思われる。

**④肢体不自由と AdS**

ここでは、7人一組となってのグループ学習が行われた。肢体不自由には、様々な種類がある。そうした子どもたちが共存することのできる方法が紹介された。

・グループ(7人)でウォーム

1)座位で全員が向かい合い、足を中心として手をつなぐ。この状態でストレッチ(花開き、上体起こし、体側を伸ばす等)を行う。

2)背中合わせで座り、手を使わずに立ち上がる。

3)人間知恵の輪を行う。

・ボールを用いたグループ学習

1)輪になりキャッチボール(名前を呼びながら、しりとり)

2)円陣バレー 20回(条件を変えて行う)

ルール1…片手しか使えない人→2名

ルール2…全員が触ること

ルール3…片脚しか使えない人→2名

ルール4…座位の人→2名

ルール5…座位2名+座位片手2名+片脚2名

ポイントは、続けられるようにすることである。したがって、ボールはやり易いものへと替えても構わない。また、意図的に不利な条件の人にボールが渡らないようにすることを避け、全員で協力して行わなければならない。

## まとめ

研修の最後には、新聞紙ボールを使ったペタンク、ペットボトルをゴールに見立てて簡易に行えるディスクゴルフ、フライングディスクを用いたボーリングなどが紹介され、用具を柔軟に代替していくことの重要性が述べられた。まとめとして、体育・スポーツの未来像とそこに果たし得る AdS の可能性が示唆された。

# 第５回指導者養成研修会総括

指導者養成委員会委員長　石渡 貴之

全国大学体育連合は，平成22年より指導者養成研修会を実施しており，第５回目を平成26年３月９日（日）～11日（火）に立教大学新座キャンパスにおいて実施した．指導者養成研修会は全国研修会との差別化を図り，特に「授業づくり」に焦点を当てての研修内容としている．今回も参加者は講師，スタッフ，補助員を含め総勢81名と盛況であった．

## ■ 第５回指導者養成研修会の内容について

指導者養成研修会は，理論と実践を通して大学体育の授業づくりに関する研修としている．今回の実技研修種目は昨年度に引き続き「レクリエーショナル・ニュースポーツ」と「ラグビー」，そして今回新たに「バレーボール」を取り上げ，それぞれの種目を代表する大学体育指導者に講師をお願いし，半期15回の授業の進め方を前提にした指導方法の研修を行った．その他に，体験講習，講演，大学教員キャリアに関するワークショップ，情報交換会，種目別ディスカッションの内容で構成された．

「レクリエーショナル・ニュースポーツ」は，スポーツが楽しいと思ったことがない学生や，体力差や年齢差がある人たちとスポーツを一緒に楽しむ方法が分からない学生に対応できる種目である．今回の研修では，誰でも楽しめるニュースポーツを人数・天候・施設などの条件に応じて１回１種目ずつ紹介して頂いた．楽しさと達成感を体験してもらうと共に，仲間のために努力することで得られる喜びの体験を通して「生きる力」として生涯スポーツを楽しむ知識・技能・自信を身につけてもらうことを目標とし，教授頂いた．講習の最後には受講者による創作実習も行われ，様々なアイデアに溢れる種目が行われていた．

「ラグビー」は，とかく危険と思われ，大学体育においては敬遠されがちな種目である．しかし，2019年のラグビーW杯を契機にラグビーの普及を図るだけでなく，これからのスポーツ実践に対しラグビー文化がいかなる貢献ができるかを共に考え，大学体育授業の新たなあり方と可能性を探るため取り上げた．東京五輪の開催決定を受け，ラグビー特有の理念でありフェアプレー精神，スポーツマンシップにも通ずる「ノーサイドの精神」が今後ますます注視されるようになる．これを見据え，「サイド」という視点からラグビーのプレー，ルール，技術，歴史，文化などについて学ぶことのできる実技と講義の授業例を紹介して頂いた．

「バレーボール」は，言わずと知れた大学体育の授業で多く取り上げられる種目である．２つのチームがネットをはさんで身体接触なくプレイできる利点があり，それゆえ男女混合でも大いに楽しめる競技である．その競技特性を生かし安全にかつ楽しくプレイするためのエッセンスを基本プレイの習得から指導法段階的ゲームの進め方まで，実際の授業での進行方法など多面的に紹介して頂いた．「楽しい」バレーボールの実現により，「つなぐ」ことが生まれ，仲間とのコミュニケーションを高めることが目標であることも説明して頂いた．

最終日の体験講習では「アダプテッドスポーツ」を取り上げ，障害のある人はもちろんのこと，幼児から高齢者，体力の低い人であっても参加することができるスポーツを紹介頂き，参加者全員で体験を行った．スポーツの楽しさと同時にコミュニケーションスキルを学べる教材でもあり，これまで行ってきた体育・スポーツの見え方や考え方をとらえ直す視点を再確認でき，これからの学生に必要な体育・スポーツはどうあるべきかを「大学」という場所から見つめ直す良い機会であった．

講演は東京海上日動の武田将史様を招き，テーマを「スポーツ活動における事故防止・安全指導」として，近年増加傾向にあるスポーツ活動中の事故の実態や，種目特性，さらには賠償責任の法的根拠や対処方法，リスクマネジメントなど，我々が授業を行うにあたり最低限押さえていなければならない事項ついて講演して頂いた．質疑応答も積極的に行われ，スポーツ活動におけるリスクと事故防止・安全指導について理解を深めることが出来た．

初日の夜には情報交換会を開催し，参加者同士の交流を深めると共に，常勤・非常勤講師の募集に関する情報共有や提供なども行った．更に２日目の夜には種目別ディスカッションを開催し，講師の先生方と講習を振り返ると共に，どのようにすれば学生が種目に対する興味関心を掻き立て，身体を動かしてみたいという気持ちにさせられるのか，参加者と講師がそれぞれがアイデア等を出し合い，笑顔あふれるとても楽しく有意義な時間を過ごした．

昨年度行い好評であった「大学教員就職に関するワークショップ（任意参加）」を，今年度は正規のプログラム「大学教員キャリア開発に関するワークショップ」として開催した．具体的には，「就職」と「キャリア開発」の２グループに分けて，大学院生や非常勤講師は「就職」，若手教員は「キャリア開発・キャリア形成」とし，講師の先生方に大学への任用までの道のりで必要なことや大学運営に関しての情報提供を行って頂いた．中堅やベテランの先生方にも入って頂き，助言役を務めて頂いた．参加者からの積極的な質疑やそれに対する応答も繰り広げられ，非常に有意義な時間であった．参加者の真剣な眼差しがとても印象的であった．

## ■ 受講者アンケートの結果について

この研修会では，今後の本連合の指導者養成研修会の運営に役立てるために，最終日の研修会終了後にアンケートを実施した．評価を５段階として（５．満足　４．やや満足　３．不通　２．やや不満　１．不満），数字に〇を付けることで評価をお願いした．アンケートに協力して頂いた人数は27名（男性21名，女性６名）であった．参加回数は2.1回と昨年度（1.7回）を上回り，複数回の参加者が増えてきたことが非常に嬉しいことであった．

研修の充実度については，非常に有難いことに，全ての実技種目，体験種目において4.7 ～ 4.8点のとても高い評価を示し，受講者の満足度が高かったことが分かった．そして講義と情報交換会，ワークショップについても，約4.0点の評価を頂いた．また，種目別ディスカッションも4.5点と高い評価を頂いた．これらの評価点を考えると，内容的には研修会全体的に満足頂いたと理解している．

## ■ 次回の指導者養成研修会に向けて

次回は従来の３月ではなく，2015年の夏（８月を予定）開催となる．今回のアンケート結果や自由記述して頂いた内容を真摯に捉え，更に充実した研修会になるように，時期，場所，実技種目，講義内容などの選定をじっくりと考えていきたいと思っている．また，少しでも会員，参加者の皆様に有用な情報についても積極的に提供できるように取り組んでいきたいと思っている．なるべく早い時期に次回研修会の広報をしたいと思っているので，是非多数の参加を期待したい．

最後に，今回の研修会に協力頂いたコーディネーター，講師の先生方，立教大学の関係者の皆様，参加者，スタッフ，補助員の皆様に心から感謝を申し上げると共に，会員各位には，FD 活動の理解と今後の研修会参加をお願いして報告と致します．